

# 養成医かわら版

## NEWSLETTER



### 自己紹介

名 前：藤澤 亮裕  
(ふじさわ あきひろ)  
勤務先：公立八鹿病院  
診療科：外科  
卒 後：9年目

### 【経歴】

- 2017年3月 鳥取大学卒業
- 2017年4月～2019年3月 公立宍粟総合病院 初期臨床研修医
- 2019年4月～2020年3月 赤穂市民病院 外科(前期派遣)
- 2020年4月～2022年3月 公立宍粟総合病院 外科(前期派遣)
- 2022年4月～2022年9月 神戸労災病院 外科(後期研修)
- 2022年10月～2024年3月  
神戸大学附属病院(肝胆脾外科、食道胃腸外科)(後期研修)
- 2024年4月～2025年3月 公立豊岡病院 外科(後期派遣)
- 2025年4月～ 現職(後期派遣)

## 【医師になるまで】

私が育ったのは香美町小代区というところで但馬牛やスキー場が有名なのですが、この谷は当時人口2500人ほどしかいなかった町でした(現在は1700人ほど)。この地域には現在も小代診療所がありますが、私が子供のころから医師確保に難渋しているようなよくある過疎地域であり、私自身あまり医師という職業に魅力を感じていませんでした。ありきたりな理由ではありますが、中学生の時に赴任された先生がとても人当たりが良く、診療内容も住民からとても評価が高かったのを見て、「自分もこんな医師になって地元に貢献したい」と思い医師を志しました。



## 【医師になってから】

大学を卒業し、初期研修先となったのは公立宍粟総合病院でした。研修先になるまで宍粟市には行ったこともなく、「しそう」という読み方も知らない状態でしたが、ここでの指導医の先生方との出会いが自分の今の進路に大きく影響しています。

自分で患者さんを診察し、診断し、治療方針を決めていくことは医師として当たり前前のプロセスかもしれません、これまた当たり前に最初からできる研修医もいないのではないかと思います。時間をかけてでもこのプロセスを待ってくださり、責任を持ちつつ研修医の考える治療方針を尊重していただける指導医の先生方のおかげで臨床医としての楽しさを感じました。その中でも私は治療という点に最もやりがいを感じました。外科手術は自分の技術で直接的に患者さんの予後を長くすることができ、3年目になるタイミングで特定診療科コースが新設されたため外科を専門にすることにしました。

## 【外科医になってから】

私自身、ハイボリュームセンターと呼ばれる施設は大学病院での後期研修以外に経験がありません。大学病院では基本的に若手が手術する機会はありませんので、自分の手術経験は主に派遣先の病院での症例しかありません。

手術はたくさん経験していることももちろん重要ではありますが近年は手術動画を何度も見直すことができるため、復習していると現場では思いつかなかつたアプローチや見えていなかつた構造物が見えてくることがあります。「どうすればこの状況でもっと良い展開が作れたのか?」、「どうすればもっと綺麗でスムーズに縫合できたのか?」などを同じ手術に対して何度も考え直すことで次に同じ状況となつた場合瞬時にイメージが湧いてくるようになります。実際に手術に入った時間よりも手術動画を見ていた時間の方が圧倒的に長いと思います。これがスポーツと似ていて手術の好きな点でもあります。「外科=体育会系」のイメージは運動部で「泥臭く基礎練習をして試合で生かす」プロセスを何度も経験していることも影響しているのではないかと感じました。基礎練習を積み重ねた上で瞬時に細かい判断を繰り返した結果、良い手術が行えると思います。消化器外科医に天才的な生まれ持つた才能は必要ありません。



## 【養成医として地域で外科医をすること】

消化器外科医の大部分はハイボリュームセンターなどで多数の症例にさらされ、消化器手術のスペシャリストと成長していくことが通常かと思います。しかしながら養成医として派遣先では末梢血管手術や乳腺手術など、消化器にとどまらず様々な手術に参加する必要がありました。血管の剥離や吻合などおそらく同期よりもたくさん経験できたことは養成医として外科医になった強みだと思っています。

また、養成医でも資格は問題なく取ることができます。私は外科専門医、消化器外科専門医、消化器病専門医を取得することができましたが、最短より1年遅れ程度で取得できています。大学院も義務年限内で卒業している同期もいるため何らキャリアの遅れにはつながっていません。私自身も神戸大学肝胆脾外科に入局しており、今後もっと難度の高い手術にも触れていきたいと考えています。

兵庫県養成医としては総合診療科ではなく消化器外科を選択させていただけのことについて同期や前後の学年の先生方に大変感謝しています。手術適応や画像所見など、最終的に手術につながらなくても気軽に相談できる存在として地域での診療を続けられたらと思います。

